

長江流域の開発と三峡ダムの建設に関する地理学的研究

谷 人 旭 (華東師範大学)

地理学からの途上国開発へのアプローチは、開発計画主体と計画立案に至る諸背景を検討することから始め、次に、計画の内容について自然環境や社会経済的諸条件をふまえ、かつ多様な地域スケールに沿った多面的検討と特徴付けにある。本報告は、三峡ダム建設

を、建国後の中国の開発政策の進展の中に位置付けるとともに、長江流域の地域開発と関連づけることを目的とする。

長江流域は、中国の東部沿海から中・西部にかけて、7つの省と2つの直轄市にまたがり、国土の4%を占める。長江の供給する水は、流域の水田米作農業を育み、水運は中・下流域の都市と農村を結ぶ地域経済システムを形成してきた。この歴史的経済地域としての長江流域に大規模な洪水調節を目指した開発計画が提起されたのは20世紀初頭であるが、具体化したのは革命後である。計画経済体制下、三線建設のための資材や人が沿岸都市から四川省など中部地域へ運び込まれた。しかし、本格的に全国スケールでの国土建設のための開発計画は、1980年代に入ってからである。その背景は、市場経済体制へ移行して改革開放政策のもと、沿岸地域の開放によってもたらされた国内の地域経済格差の深刻化を受けて、内陸の地域開発の必要性が指摘されてからである。

中央政府は、1992年、長江流域を、浦東を中心に開発の進む上海を龍頭とし、三峡ダム、重慶を龍尾とする一体的流域開発の基本的フレームを設定し、洪水調節・灌漑、発電、水上航運などを包括する三峡ダムの建設を決定し、実施に移した。1996年には、重慶市を直轄市に格上げして、四川省東南部の水没地域の75%、移住人口130万人をその行政地域に編入した。

三峡ダムは、21世紀中国の最大の河川開発プロジェクトと位置づけられる。湖北省宜昌付近に建設される大小3つのダムによって、重慶の足元まで、貯水池となる。これによって5000トン級の船舶が遡行可能となり、舟運に関してはここまで長江の中流域が拡張されることになる。そして重慶は、新しい開発拠点として、中・西部への影響力を増すことが期待されている。さらに、当面は、移住者への就業機会の提供も期待されている。ただ、巨大なダムの出現で、その耐震性、水質の汚濁など根本的な環境問題が完成後に顕在化する恐れもある。